

続詞花集の方法

鈴木徳男

一 撰集資料としての家集

続詞花集恋部について、阿部方行氏「続詞花和歌集恋部の配列構成」（『中古文学』第十八号、昭和五一年九月）は次のように論じている。

勅撰集恋部は、恋の進展を時間的推移に従って配列していく構成方法をとっている、と指摘されてきた。続詞花和歌集恋部三巻の配列構成もそれに一致する。…ただ、全体の構成を考える際に、続詞花集恋部の冒頭歌と末尾歌には、注意しなければならない点がある。…恋部の冒頭と末尾に、女の若さと死が対置されていることになる。…（筆者注・女の年齢を示すと思われるもの、四九八赤染衛門・五二二平経章朝臣・五五一藤原長能・五五九藤原正家を掲出）…女の年齢の推移をも配慮して恋部を配列構成しているように考えられるのである。このことは、恋部冒頭と末尾が、物語（一代記）の型を踏んでいることと同じ構成意識に基くものである、と見なければならぬであろう。

この阿部氏の論をふまえつつ、恋部の冒頭と末尾の歌群を掲出して続詞花集の方法を検証する。まず、「恋上」（四七八～五四三）のうち冒頭から五〇九番歌までを取り上げる。便宜上、引用歌にそれぞれ通し番号を付す。なお、本文は陽明文庫本を底本に諸本や出典資料を参照して確定した拙著『続詞花和歌集の研究』（和泉書院刊）本文篇所収のものに基づくが、歴史的仮名遣いを用い、送り仮名を統一し、濁点を付すなど、適宜に表記を改めた。

女のもとにつかはしける

藤原惟成

1 うらわかみ荻の下葉に置く露をさもほのめかす風のなきかな

題知らず

隆恵法師

2 知らせばやしげき人目を忍草下葉に結ぶ露ばかりだに

内裏百首歌にしのおるこひをよみ侍りける

源通能朝臣

3 いざさらばほのめかしてむとばかりも心にのみぞいひあはせつる

題知らず

三宮

4 いかにせむ心を人にそめながら色にいでじとしのぶころかな

賢智法師

5 いつしかと色にいでじと思へどもみゆらむものを堪へぬけしきは

もの申しける女のはらからなりける人につかはしける

能因法師

6 色にこそいづとなけれどむらさきのひともと故に思ひそめてき

人知れず心ざし侍りながらえしもいひいですぎける

女のまきものをかかせ侍りけるおくにかきつけ侍りける

藤原伊行

7 あぢきなししてしもやまじおもふ事いひ出でてこそ身をもうらみめ

内裏百首歌に忍恋をよめる

藤原重家朝臣

8 づらからむときこそあらめあぢきなくいはで心をくだくべしやは

女のもとにはじめてつかはしける 賀茂成助

9 思ふ事いひだにいでで恋ひしなば誰故とかは君がきかまし

題知らず 源明賢朝臣

10 嘆きあまりしらせそめつることのはもおもふばかりはいはれざりけり

藤原季経朝臣

11 思ひあまり色にいでぬることのはは散るとも何かくるしかるべき

堀河

12 おもふともいはばなべてになりぬべし心のうちを人にみせばや

藤原頼保

13 しるらめや今こそ人を水の面に物思ふはしをわたしそめつつ

内裏百首歌にはじめのこひの心をよめる 源雅重朝臣

14 我が恋は岩間をくぐる山水のもらすにつけて袖ぞぬれける

ひとりゐたるを見てこふといふことをよませ給ひける

御製

15 人はみなさよ更けぬとていりにしを暁までに月みしやたれ

女のかみをうちやりてねたるをみつるにやらむとて人

のとひ侍りければ 藤原経衡

16 いとどしくみだれて物を思ふかなねくたれがみをみつるけさより

一院山にのぼらせおはしましたりけるに御ともにはべ
りけるにそうどものぐしてもの誦せさせけるわらはの
心にかかりておぼえければ房をたづねていひつかはし
ける

参議隆季

17 君故におもひいりぬるみ山への谷の心はふかきとをしれ

ことの外におもへりける女に

平兼盛

18 谷深みやくすみがまのけぶりだに峰の雲とはならぬものは

恋の心を雲によせてよみ侍りける

徳大寺左大臣

19 ひとめみし人は誰とも白雲のうはの空なる恋もするかな

女の琴ひきけるをききてよませ給ひける

御製

20 琴の音にかよひそめにし心かな松吹く風にあらぬ身なれど

人のむすめのをさなきをかたらふにまだてもかかずと

てかへりごともせざりければ拳周朝臣にかはりて

赤染衛門

21 わかの浦のしほまにあそぶ濱千鳥ふみすさぶらんあとなおしみそ

女のもとにつかはせる文を返したりければ

読人不知

22 とどろきの橋もわたりてこころみきまたふみかへす人はなかりき

題知らず

藤原雅親

23 よとともにもむすばほれたる我が恋や野中にたてるいはしろの松

源親房

24物をこそしのべばいはね岩代の森にのみもるわがなみだかな

雨ふる日しのびたる人のもとに

堀川右大臣

25人知れず物思ふころの袖みれば雨ともしらず涙ともなし

堀川中宮の内侍にもいふほど雨の降りかかりければ

少將藤原義孝

26わびぬればつれなしがほはつくれども袂にかかる雨のわびしさ

題知らず

大納言雅通

27よとともに人めをつつむ身なれどもおちちる物は涙なりけり

馬内侍

28人とはばいかがこたへむ涙だにこころしてやは袖をぬらさぬ

前治部卿雅兼

29かかりける涙と人も知るばかりしぼらじ袖よくちはてねただ

隆縁法師

30日数へばいかにせよとて我が恋のきのふに今日はまさるなるらむ

神祇伯頭仲

31物思ふといはぬばかりはしのおともいかがはすべき袖のしづくを

内裏百首歌に忍恋の心をよめる

藤原重家朝臣

32玉もかるいせをのあまの袖ならばぬるとも人はとがめざらまし

阿部氏論は「恋上」を四つの歌群に大別できるとし、掲出の三十二首は、1から14と15から32の二つに区分している。前者十四首を「忍恋」に主点を置いた「初恋」の世界とし、さらに1〜8、9〜14に細分して検討している。後者十八首は相手に思いを伝えても反応のない状況と「忍恋」とし、さらに15〜22、23〜32に分けているが、「涙となつて思いが発露するまでに至つた様を詠めることで、同じ「忍恋」を主題とするものであつても…一層恋愛の程度は進行している」と分析している。

ところで、出来上がった歌集の配列に従い隣接する一首毎のつながりや歌群構成を検討するのも有効であるが、ここでは別の観点から、各作品の時代にこだわつてみたい。1 惟成 4 三宮 6 能因 9 成助 16 経衡 18 兼盛 21 赤染衛門 25 堀河 右大臣 26 義孝 28 馬内侍はいわゆる拾遺・後拾遺時代の歌人で、統詞花集において旧歌人作とみなされる詠である（ゴチック体で示した）。例えば、1の「下葉」「露」といった歌材、「さもほのめかす」という表現は2、3の歌に連鎖的にみられる。4、6の「そめ」「色にいづ」は5中にみえる（11、13にも）。9の「思ふこといひだにいで」を受ける表現が7、8、10、12、13などに認められる。15の「暁まで月みし」は16の、寝乱れたあさねがみをみた今朝から恋心がさらに乱れたという内容と関連する。16の「物を思ふ」も13や17に響き合う表現がある。18の「谷」「峰」「雲」も前後の作に関わりを持つている。21の内容、歌枕を詠み込むことなども以下につながる。25、26、28の「袖」「涙」「雨」も同様。なお、1、21が阿部氏があげる女の年齢を示す作。

こうしてみると、旧歌人作は、内容・表現などにわたり、歌群の基調をなしていることが知られる。換言すれば、冒頭歌群の場合、旧歌人歌群の、いわば根幹部に、3、8、14、32の内裏百首などの近代歌が挿入された格好になっていると理解できる。そして、内裏百首詠の詞書に示されている題は、歌群の主題を念を押すように表れているとみえる。

次に「恋下」(六一〇〜六七〇)のうち六四七以下の「恋の終局」歌群を同様に見る。

題しらず

西院皇后宮

1 わすれてもあるべきものをなかなかにとふにつらさを思ひ出でつる

たえて後の恋といへることをよめる
藤原為忠朝臣

2 今さらにいひないだしそ勝間田の池のつつみはむかしきれにき

久しく音せぬ男のもとよりことをかりて侍りける、つ

かはすとして
安芸

3 憂き身をば何につけてか思ひいでん尋ぬることのなからましかば

ことひく女にもの申しわたりけるをきくこと侍りけれ

ばとはずなりにけるに女のもとよりことをさへやわす

れぬるなどいへりければ
藤原尹明

4 人にまたつまなれにけることなれば憂きためしにはひくと知らずや

わすれにける男の思ひいでてまうきかよひけるがまた

絶えにければ
二条大宮別当

5 今さらに何かは袖をぬらさまし野中の清水思ひ出ですは

たえて久しくなりにけるをとこの思ひいでて今はあだ

なることは侍らじなど申しける
土御門斎院中將

6 年経れど憂き身はさらにかはらねばつらさも同じつらさなるらん

かれがれになりける人のもとへむつきの比ほひつか
はしける
関白家弁

7 わすれにし人を忘れぬ心こそかはれるとしもかはらざりけれ
時々まうできかよふ人のむまをうしなひて、もしそこ
にまうできてや侍るとたづねければ
馬内侍

8 あくがれてゆくへもしらぬ春駒は面影ならでみゆるよもなし
むすめのもとにかよふをとこのかりにまかるになむと
てたちをこひにおこせたりければつかはすとて
赤染衛門

9 かりにぞといはぬさきよりのまれずたちとまるべき心ならねば
忠盛朝臣あながちにいはせければ心よはくなりける

後かれがれになり侍りければいひつかはしける
平教盛朝臣母

10 ならはねば人の心もつらからずくやしきにこそ袖はぬれけれ

題知らず
権中納言実国

11 憂きながらつらさはことのかずならず恋しきにこそねはなかれけれ

弁乳母

12 恋しさはつらさにかへてやみにしをなにの残りてかくは悲しき

俊恵法師

13 おもひかねなほこひぢにぞかへりぬるうらみはすゑもとほらざりけり

前律師俊宗

14 人心つらきも今はものなれてうらめしとだにいはれざりけり

左大臣家卿

15 身のうさを思ひもしらでありふればつれなきなさへ立ちぬべきかな

かざしふたばといふさうしをとにもものいひけるをと

このふた処につきてかざしをばたえにければかざしに

かはりてみあれの日あふひにかきてつかはしける

小大進

16 おもひきや二葉にかけしあふひ草よそのかざしにならんものとは

女の深山にもいらまほしきよいひたりけるに

民部卿齊信

17 山よりも深きところを尋ぬれば我が心にぞ人はいるべき

をとこにわすられてなげき侍りけるころ霜のふれるあ

したに人のもとへつかはしける

和泉式部

18 今朝はしもおもはむ人はとひてまし妻なき閨のうへはいかにと

かたらひけるわらはをゑじてしばしとはず侍りけるに

かのわらはの文をおこせて侍りけるはうすずみにかき

たりければ

僧都覚基

19 うすずみにかくまでしりぬ君はさはみえぬをよしと思ふなるべし

ただならずなれる女をわすれてこと人にうつりけるを

とこのもとへかの女にかはりてつかはしける

平実重

20 いかだしの此の瀬ばかりをすごせかし心のひかむかたはありとも

さうぶのねの長きを入道前大きおほいまうち君のつか

はしたりければ

高松北方

21 ながしもしらずやねのみながれつつ心の憂きにおふるあやめは

五月五日人に遣はしける

讀人不知

22 身の憂きにあやめの生ふるものならばけふばかりにも人はきなまし

四条宰相をとしごろいひわたりける、あるまじきさま

にのみおもへりける心ざしにまけてしたしくなりにつ

るをはた思ふ心やありけむおともせて四五日ばかりあ

りて五月五日ながきねをやる

藤原能通朝臣

23 三島江におりたちしよりあやめ草まだこときはのねをもみぬかな

ありしよりおもくわづらひてなむとてかへりごともし

はざりければゆきとぶらはんとおもふをおほやけごと

さしあひて二三日ばかりありてまかれりければはや身

まかりにけりおとづればべらばたてまつるべきよしに

てかきおきたまへるとてありしさうぶのねにむすびつ

けたるふみをとりにてたるにかけりける歌

24 おりたちししまの水やあせにけむおひしあやめのねもかれにけり

8 馬内侍9 赤染衛門12 弁乳母17 齊信18 和泉式部21 高松北方23 能通24 四条宰相が旧歌人の詠(ゴチック体で示した)。冒頭の歌群に比べると、旧歌人の作と他の作との関連性をあとづけにくい^{注1}が(特に初めの七首は「絶えて後の恋」といった主題でまとまり独立性が強いように思われる)、やはり、旧歌人詠の詞書が語る具体的状況は「恋の終局」歌群の基調となつてい¹ると言い得るのではないか。また、巻軸の能通と四条宰相との贈答歌は袋草紙「雑談」にみえるが、これら末尾歌群には雑談的性格がみられ、編纂意識の上というより資料収集の段階で、撰者の和歌観による雑談的要素が持ち込まれている。その傾向は旧歌人により顕著である。

恋部冒頭の三十二首、末尾の二十四首を例にして恋部の構成を検討したが、要するに、惟成や和泉、赤染、馬内侍などの女流歌人の作によって、その基礎となる根幹部が出来上がつてい¹ると考えられる。歌材や表現、内容また一代記の型を踏んでいるという部立全体の意図にわたつて旧歌人の作が基調をなしているのである。従つて、女の年齢を示す歌がこれら旧歌人らの作であることも偶然ではない。

さらに、巻頭歌であつた惟成を例にして今少し考察する。惟成の総入集歌数は次の三首(四七八・五六九・六一〇)で、多くはないが、すべて恋部にみられ、しかも配置からしてこの部立において重要な意義を持つてい¹る。

a 恋部上の巻頭歌

女のもとにつかはしける

うらわかみ荻の下葉に置く露をさもほめかす風のなきかな

b 恋部中の「恋が再燃する兆しをみせながらも再び疎遠になつていく」歌群の冒頭

はやうみ侍りける女内わたりにありとききて五節の比遣はしける

けふかざす神のいがきの玉ひかげむかしのあとをたづねてぞくる

c 恋部下の巻頭歌

題知らず

しのびしに心の限りつきにしをあやしや何のものはおもふぞ

a は阿部氏の言う一代記の型に関わる冒頭の一首であり、b とともに現実の恋の場で詠まれている。c は「題知らず」であるが、一首のみえる匡衡集によると「又、人に」とあつて a、b と同様のことが言い得る。これらを次に挙げる詞花集の入集歌（二・二三七・一九五）と比較すると、d、f が内裏歌合、e が障子和歌の詠であるから、明らかに統詞花集が褻の歌を採用していることがわかる。

d 巻第一春部

寛和二年内裏歌合に霞をよめる

きのふかもあられふりしは信楽の外山のかすみ春めきにけり

e 巻第三秋部

一条摂政家障子に網代に紅葉の隙なく寄りたるかたかきたるところによめる

秋深み紅葉おちしく網代木は氷魚のよるさへあかくみえけり

f 巻第七恋上部

寛和二年内裏歌合によめる

命あらばあふ世もあらむ世の中になど死ぬばかり思ふ心ぞ

かつて、拙稿「清輔と能因法師」（『ブディスト』第十三号・拙著『統詞花和歌集の研究』所収）において、統詞花集の撰者藤原清輔は、能因自撰の家集を手元に置き、褻の歌に能因らしさを認めて、歌数上でも注目される十一首を入集させているなど、詞花集と比較して惟成と同様な能因詠十一首の場合を考察した。つまり、家集を手がかりにすることに

よつて各歌人の個性を把握し撰集に生かしているのである。なお、河合一也氏『続詞花集』別部の配列構成について「**語文**」第七十五輯・平成元年（二月）では、能因詠が部立全体の性質に関わる旨を論じている。

こうした旧歌人の扱いは、恋部における「物語（二代記）」の型を踏んでいる」ことも関連すると思われる。このような構造は撰集の具体的方法に関わるのではない。

撰集の作業過程を推測する意味で、歌集をいったん分解して入集歌人や撰集資料別によるそれぞれの層を抽出するために、撰集資料として家集が用いられたと思われる歌人を列挙すると表1「**続詞花集入集作者と家集の共通歌一覧**」の通りである。河合一也氏「続詞花集の撰集資料について」（『語文』第五十二輯、昭和五二年）が私家集と続詞花集との共通歌を一覧して考察を試みているのを参照したが、さらに他の文献にあたるなどして確実性の高いものに限った。

つまり、旧歌人の撰集資料は、一部の歌合歌などを除き、主に家集であろう。（他に有力な撰集資料に玄々集がある。）言い換えれば、家集による旧歌ばかりの根幹的な層をなす歌集を想定できる。例えば、佐藤恒雄氏「新勅撰和歌集成立への道」（『新古今集とその時代』平成三年五月）によると、新勅撰集の撰集手順について「おそらく貞永元年中約半年間の選歌も、旧歌、近代歌、現存歌という、時代別三層の歌を、少なくとも一通りは選歌してきたと考えてよいであろう。定家の選歌は三層の時代の歌をまず各別に選ぶことから始められたのであった。そして、旧歌を選ぶ時には、私家集や撰集その他の中から歌を抜き出し、ごく原初的な配列原理に従って並べ、位置を変えたり、追加削除などをくりかえしたであろうこと、新古今集の撰者進覧本の草稿において瞥見したところに準じて考えてよい。近代歌、現存歌も同様にして部分的な選歌が数多く堆積されていたであろう。その後の段階として、三層の歌を一つの歌集として綯い交ぜつなぎ合わせてゆく作業、すなわち部類、配列、切り入れ、切り出しなど削修の作業が頻々と行われて、徐々に撰集として完成に向かっていったに相違ないのである。」とある。こうした作業過程を続詞花集の場合にも援用できるのではない。

恋部の例における、阿部氏の論が示唆するところの、一代記の型を踏み女の年齢の推移を基調にしているという構成は、家集を持つ中古の歌人達の「層」によつて根幹部が出来上がっていると言い換えられよう。内裏百首の場合でみるように、その根幹部の上に近代の歌人達の層が追加する形で挿入していると考えることができないか。すなわち、編纂上の、中古と近代の二層の構造が看取されるのである。その場合、中古の歌人の層は家集が有力な撰集資料であつた。

二仁和寺（寛性法親王）と統詞花集

統詞花集の方法を以上のように整理把握した上で、統詞花集における「近代」について次に検討したい。^{注3}

ここで注意しなければならないのは、今撰集の方法（入集歌の上限は保安二年）や統詞花集という名からも窺えるように「近代」が崇徳院時代（即位は保安四年）を含んでいることである。しかも、保元の乱の結果、治天の君後白河院の崇徳院に対するあつかいから推して、勅撰を目指す歌集にとつて「近代」の扱いが微妙な問題であることが思量できる。^{注4}

そこで、保元の乱後の歌人についての評価をみると、二条天皇時代の作としては、天皇近臣、女房の作、歌林苑会衆（近臣、女房と一部重なる）のいくつかと寛性法親王作などがある。さらに、この時期に詠まれた可能性のある、作歌事情、年時不明の歌百首あまりを加えて約百七十余首となる。そのうち、下命者になるはずの二条天皇（または内裏歌壇関連）の優位が見られるかという点、必ずしもそうではない。例えば、久安百首からの採用、作者十人三十八首と比べて、規模の違いはあるにしても、応保二年内裏百首からの入集は七首、内訳は御製四、重家二、通能一、雅重一である。例とした恋部歌群でも、御製や内裏百首の作は歌数の割には基調とはなっていない。また、個人別の入集歌

数でみると、覚性法親王が崇徳院（一一八首）に次いで集中第二位（一六首）である。ちなみに二条天皇は七首。^{注5}

拙稿「『統詞花集』の成立」（『国語と国文学』第六十六卷第十二号）において、統詞花集が勅撰にならなかった要因のひとつとして集に内在する崇徳院時代の重視の傾向を論じた。つまり、清輔の近代観は崇徳院時代が中心になっている。崇徳院と二条天皇を入集歌においてその評価を比較しても主と従の関係は明かである。とすると、時代を認識していたはずの清輔は「縦不遂善懷、争可秘清撰」（跋文）と考え、なぜあえてこのような歌集を編纂し残したか。こうした傾向の歌集を受容する場があったのではないか。次に集中に手がかりを求めていささかの推測を試みる。

統詞花集中の詞書における敬語の用法を調査すると、表Ⅱ「統詞花集中の敬語使用一覽」のようになる。この表Ⅱを参照すると、先行する勅撰集（千載集とも）などと比べて、多少の乱れは措くとしても、天皇、后は問題ないが、親王（内親王）の場合で、他の撰集で例を見ない覚性法親王に対する敬語使用（五五四・五六一・七一一・七三四・八二九）が注意される。覚性法親王は鳥羽院第五皇子、大治四年（一二二九）生まれ、崇徳院同母兄。久安三年（一二四七）法親王宣下、仁平三年（一一五三）十二月に第四世覚性法親王が入滅すると、仁和寺の主、第五世御室となる。二条天皇は幼少に弟子として仁和寺に入ったことがある（愚管抄）。嘉応元年（一一六九）十二月十一日入滅、四十一歳。家集「出観集」には、崇徳院、二条天皇との贈答歌がみえる。

集中における覚性法親王の処遇から、ここで、勅撰と成らなかった後の行方についてのひとつの仮説をたてたい。つまり、二条天皇崩御後、統詞花集は御室に献呈されたのではないか。

仁和寺と清輔について、西村加代子氏「仁和寺と歌園と顕昭―覚性法親王時代における―」（『国文論叢』第九号・昭和五七年三月）によれば、井上宗雄氏「清輔年譜考」（『平安後期歌人伝の研究』）、私家集大成・中古Ⅱ「出観集」解題（松野陽一氏）などをふまえ、「清輔は、覚性法親王のもとに親しく出入りしていたものと思われる。…（出観集と清輔集の）共通する歌題から推して、覚性法親王と清輔は、何度か歌会で同席したと考えられる。」などと論じている。また、仁

和寺と崇徳院は、周知のように、保元の乱後の経緯をみれば乱に敗れた院が逃れた所であり、崩御後、崇徳院の復権にはたした役割（遺児元性と血経など）も見られる^{は6}。

仁和寺の蔵書目録とされる古蹟歌書目録「第五 私修集」に続詞花集の名がみえる。この古蹟歌書目録は、太田晶二郎氏「桑華書志」所載「古蹟歌書目録」（日本学士院紀要）第十二巻第三号、昭和二十一年一月・著作集第二冊）、同「和歌童蒙抄はどなたの為に作ったか」（著作集第二冊）によると、守覚法親王（第六世御室）の時の編録とする。成立が近接するところから清輔が直接献呈した一本が御室に蔵されていたことが想像されるのである。

なお、新撰和歌の場合との関連も付け加えておく。というのは、新撰和歌の序文中にある「橋山」（黄帝の墓がある陝西省の山）をめぐる類似の表現が続詞花集の跋文にも見える。すなわち、新撰和歌の序文中に「貫之秩罷帰日、將上献之、橋山晚松、愁雲之影已結、湘浜秋竹、悲風之声忽幽」（傍線部は醍醐天皇の崩御をいう）とあり、続詞花集の跋文には「恨之尤切、仙居之月早藏、愁之至深、橋山之雲何在」（同じく二条天皇の崩御をいう）とある。どちらも奉るべき相手を失った嘆きを述べている。新撰和歌は、樋口芳麻呂氏「『新撰和歌』の成立―序を中心に―」（『平安・鎌倉時代秀歌撰の研究』所収）によれば、（紀貫之は）「土佐で撰定を終えて帰京したもの、献上するあてのない失望感から、帰京後の在野の期間に序を草し、箱の中に収めたが、時がたつにつれて『新撰和歌』の存在が世間に知られ、また失意からかたくなになった貫之の心も和んで、従五位上玄蕃頭の地位も得た時期に、貴人に求められるままに披見に供したのではなからうか。」とある。憶測であるが、似た様なケースが考えられないかと思う。なお、清輔は、新撰和歌の序文のこの部分の対句を袋草紙「故撰集子細」に引用している。

以上、前代歌に対する続詞花集の方法を論じて、保元の乱後の当代における「近代」の混乱を述べ、崇徳院の和歌活動を継承したのは仁和寺御室であったことの一例として続詞花集が御室に献呈されたという仮説の蓋然性を示した。

注

1 前掲阿部氏論文は1から15と16から24に大別する。前者十五首を「恋の終局」とし、さらに1〜9、10〜15に分けている。後者十四首について、「統一的な主題というべきものを認め難いが、恋部終末に現実の恋の場で詠まれた歌を配列することで、その雰囲気を再現しつつ恋部全体を締括るべく意図したもの：いずれも疎遠になっている状況下での詠」と述べている。

2 佐藤恒雄氏「新古今集定家進覧本の形態と方法」(『論集藤原定家』昭和六三年九月)は、新古今集をめぐって同様に論じている。

3 統詞花集の方法として、歌人による編纂意識が強く、次のように要約できよう。

I 「中古」と「近代」の時代別重層構造

(中古の層は、編纂過程において、そのみの歌集を想定できるが、近代は漸増的な選歌の堆積であろうか。あるいは清輔撰の「今撰集」の存在を想定するのも可能。)

II 各歌人の個性尊重の姿勢

(特定の歌人がある部立に偏る傾向、具体的編纂方法に関わる歌人評価)

III 襲の歌の尊重、和歌説話への関心など雑談的性格

(編纂意識の上というより資料収集の段階で、撰者の和歌観による雑談的要素が持ち込まれている)

なお、Iは拙稿「統詞花集「釈教」部について」(『佛敎文学』一七号)にも論じた。IIは前掲拙著を参照。また、IIIは別稿で再考したい。

4 保元の乱前後の崇徳院をめぐる微妙な問題は清輔本古今集の「新院御本」の呼称表記にも関連するらしく思われる。川上新郎氏「曼殊院藏清輔本古今和歌集管見」(『汲古』第二〇号)によれば、次のように論じている。詳細は川上氏論文によられたいが、要約する。「二条院が東宮であった時期久寿二年九月二十三日(保元三年八月十一日)、清輔本古今集と清輔の『注古今』が当時の東宮守仁に進覧されることがあり、数年を経て平治元年七月九日に返預された。この時進覧された本は

仁平四年本と考えるのが有力。曼殊院藏清輔本古今集が仁平四年本である可能性が高い。仁平四年本が二条院に進覧されたことと、本書で「御本」「新院御本」と書かずに、「花園本」の呼称が用いられていることには、何らかの関連があるかもしれない。」

5 なお、二条天皇の作のそれなりの評価について、拙稿「続詞花和歌集」の秋月歌群について（『平安文学研究』七十二輯・昭和五九年一二月、前掲拙著所収）で考察した。秋月歌群も時代別重層構造からみると、二条天皇作の配置には再検討の余地がある。

6 崇徳院の復権について、従来の研究を、拙稿「西行詠「よしや君……」をめぐって」（『日本の仏教と文化』所収）に整理したことがある。

付記

本稿は和歌文学会関西例会第四十九回（龍谷大学・平成四年七月十一日）での「保元の乱と和歌史―続詞花集の方法―」と題した口頭発表に基づき、その一部をまとめたものである。席上、会員の方々にご教示をいただいた。記してお礼申し上げ、また十分に生かすことができなかったことをお詫びし今後の課題としたい。

表Ⅰ 続詞花集入集作者と家集の共通歌一覽

(作者・総歌数・共通歌番号)

元輔	元真	顯綱	顯季	兼澄	兼盛	經信母	經信	經衡	惠慶	匡房	匡衡	義孝	徽子	嘉言	家經	下野	惟成	惟規	為仲	A
一三	一	五	八	二	四	二	八	七	四	一一	二	三	三	五	二	二	三	二	二	
24・69・333・334・335・342・349・672・801・852・	925・307・347・429・811・	44・307・218・221・811・	36・154・218・221・235・314・751・753・	326・346・	23・495・535・825・	196・592・	7・37・210・282・311・313・318・764・	149・206・327・493・687・774・991・	180・211・378・	72・139・191・202・220・247・558・707・785・889・	637・922・983・	503・899・	638・179・714・802・918・	32・	182・	315・512・	478・569・ (610 匡衡集にあり)	533・583・	698・715・	
*6					*5		*4		*3	*2			*1							
道命	道濟	道信	道綱母	定頼	長能	仲文	大式三位	増基	相模	赤染衛門	小大君	如覚	順	重之	実方	紫式部	国基	康資王母	高遠	
八	一三	三	二	七	六	一	六	二	五	一三	四	三	二	四	九	一	七	二	二	
232・385・828・884・908・955・	791・820・885・152・173・181・255・341・344・386・	8・90・118・152・173・181・255・341・344・386・	30・301・970・	18・	83・290・725・770・818・859・932・	222・242・267・297・345・551・	995・239・257・263・576・617・928・	194・989・976・	552・619・976・	903・984・460・498・538・630・655・733・831・833・841・	302・614・855・795・910・	462・795・910・	328・422・	424・584・683・927・	66・571・618・772・796・827・936・938・	298・	29・159・281・560・677・	330・68・84・		
*17					*16 *15 *14		*13 *12 *11						*10 *9					*8 *7		

肥後	忠盛	摂津		俊頼	俊忠	行尊	行宗	顯輔	堀河	基俊	季通	雅兼	B	和泉式部	頼宗	輔親	弁乳母	範永	馬内侍	能宣	能因		
九	三	二		一一	一一	七	七	一〇	一三	一一	六	三		三	三	二	三	六	四	六	一一		
5	295	745	975	1	528	25	234	187	204	602	34	223		695	171	67	87	273	106	285	13	887	11
352	632	748		142		387	236	268	241	640	75	506		806	240	502			384	303	89		296
475	949			249		882	237	523	410	705	101			893	556	924			693	505	217		403
701				272				526	510	757	150				596				710	654	266		483
726				309				697	515	762	212				599				866		985		671
				722				704	624	839	524				604						987		675
				752				741	703	856					625								690
				780				784	712	864					631								730
				880				879	736	865					642								815
				926											664								821
														* 21		* 20				* 19		* 18	

隆信	頼輔	頼政	登蓮	長方	忠通	西行	成仲	小侍從	俊恵	重家	寂然	資隆	讃岐	公重	顕広	教長	覚性	C
一	二	四	四	一	八	一	三	三	四	三	四	三	二	三	八	七	一六	
794	620	76	706	537	49	216	409	105	91	485	787	28	550	256	50	12	734	79
	919	530	723		107		548	456	190	509	902	227	566	316	127	17	781	137
		702	792		117		778	565	564			319		758	185	77	793	141
		863			143				659						284	170	829	164
					201										372	847	956	189
					557										724	848	958	207
					783											891	950	299
					961										911			554
																		561
																		711

* 1—袋草紙「連歌骨法」に家集名がみえる（以下同）。

2—139、707は書陵部本系家集にみえないが堀河百首による

3—97は現存家集にはないが俊頼髄脳にみえる

4—和歌一字抄からの採用（313以外）が考えられる（河合論文）

- 5 | 袋草紙「故撰集子細」
- 6 | 続詞花集では読人不知
- 7 | 袋草紙「希代歌」
- 8 | 398は金葉集二度本（版本など）、後葉集にみえる
- 9 | 袋草紙「雑談」
- 10 | 袋草紙「故撰集子細」
- 11 | 729は玄々集あるいは三奏本金葉集による
- 12 | 205は高倉一宮歌合。325は新撰朗詠集にみえる
- 13 | 袋草紙「故撰集子細」
- 14 | 袋草紙「諸集人名不審」
- 15 | 玄々集、三奏本金葉集からの撰入（河合論文）
- 16 | 明王院旧蔵本系家集によるか。859は栄華物語によるか（河合論文）。なお、470も定家本系にはみえない
- 17 | 992は枕草子にみえる
- 18 | 袋草紙「御賀歌作法」「雑談」
- 19 | 658は玄々集による
- 20 | 袋草紙「雑談」
- 21 | 嘉応二年住吉社歌合清輔難陳

注
 家集は私家集大成によった。B・Cの歌人は「近代歌人」、Cは保元の乱後に生存の歌人。

表II 統詞花集中の敬語使用一覽

(敬意の対象者・歌番号)

村上天皇・六二	23	415	638
円融院・六四	796	827	
花山院・六五	901		
一条院・六六	326	382	386
三条院・六七	167	645	401
後一条院・六八	332	740	402
後朱雀院・六九	111		740
後冷泉院・七〇	315	837	832
後三条院・七一	368	429	
白河院・七二	7	37	39
堀河院・七三	133	513	588
鳥羽院・七四	53	70	261
崇徳院・七五	15	48	(49・50)
近衛院・七六	291	337	353
後白河院・七七	355	400	830
二条天皇・七八	38	158	172
やむごとなき所	432	800	(おほやけの御かしこまり
不明	987		「内裏御屏風…」(能宣の作)

(堀河百首一六首を除く*2)

(久安百首三六首を除く*3)

斎宮女御	638	「内に奉り給ひける」
東三条院	8	341
上東門院	357	441
枇杷殿皇后宮	676	468
麗景殿女御	87	740
後一条中宮	383	769
贈皇后宮	438	833
郁芳門院	398	935
二条大皇太后宮	148	
待賢門院	410	745
美福門院	430	748
上西門院	358	420
女御(聖子)	336	829
従一位宗子	746	738
斎宮	328	
大斎院	766	
帥宮	625	777
三条式部卿宮	559	
実仁親王	387	
三宮(輔仁)	813	
大教院一品宮	371	
仁和寺宮(寛性)	554	
故一品宮	329	

は敬語なし。

近衛院詠854の詞書中で

「前坊かくれさせ給ひて…」

土御門前斎院 436
堀河院前斎院 436
北の宮 910

明神

374 (塩屋)・379 (北野)・380 (春日)・476 (清
水)・990 (糺)・991 (竈)

道長
忠通

326・357
208・864・865

* 5

* 1 「後朱雀院御時、梅壺の女御御方の人々はそどのにうへの
人々と物語して侍るに経信卿しばしかくてまち給へとて一
品宮の御方へまゐりにけるほどに時鳥のなきければ」

2 「堀河院御時百首歌たてまつりけるに」

3 「新院人々に百首歌めしけるに」

4 前仁和寺宮(寛法)には敬語なし。

5 208は静嘉堂本、神宮本は敬語がない。864・865は基俊歌。他の
場合敬語はない。

注 傍線は敬意の対象者本人の作を示す。天皇(院)名の
漢数字は代数を示す。